

先行く仲間たちの居る場所

図書館、多言語コンシェルジュ

大川正彦

二〇一二年度に新しくできた一年生秋学期の必修科目「基礎演習」の設計運営について、言語文化・国際社会両学部のかなかにワーキング・グループができ、そのメンバーになった。授業の主眼は「論文の書き方」の実習におかれた。ワーキング・グループ内での議論、担当教員に向けた説明会を通じて、論文とは「問い、主張、論拠」の三つの柱からなるということを最低限の了解事項とし、二〇一二年十月、授業がはじまった。

その授業のなかでも言った。自分の学生時代を振り返ってみると、恥ずかしいことばかり。楽勝科目だけをテキストにとって、授業はさぼりまくり。試験前日になったら、なんとか入手した「模範解答」を暗記して、試験場に臨む。レポートが出れば、切った貼ったの「剽窃」のしまくり。そんな調子で卒業した。己のこんな過去をなかつたふりをして、「論文の書き方」なんぞ、よく教えられたもんだ、と思ってもいた。そのつどの課題に応じて書くなかで自分を磨く、なんて発想、これっぽっちもなかった。

それでも「基礎演習」担当者として、自分があんな風に書きたいと思った論文、自分のなかが救われた論文を念頭に浮かべながら、論文の胆をなんとかバトン・リレーしようと四苦八苦（二人相撲？）した。

「自分で考える力」なんて言われるけれど、なんでも

かんでも自分一人だけでやろうとするからおかしくなる。できなけりゃ、きちんと仁義をきって他人の頭を借りるとよい。論文という型の力を借りるとよい。同じような道、似たような道を先行くひとたちがどんな風に歩いて来たかをまねてみたらよい。――授業では、こんなことばかりを話していた。

好運だと思う、キミたちは。外大の図書館には多言語コンシェルジュの学習相談デスクがある。「基礎演習」のポイントをわきまえた院生の先輩たちが、いろいろと実地の手本となって相談に乗ってくれる。なんでもかんでも自分一人だけでやろうとするのではなく、他人に助けを乞うことも大事な力のはずだ。そんな力を使って、それぞれの曲がりくねっているかもしれない道を歩く、その歩く練習をつづけていけば（たぶん）なんとかなる。足繁く通いつづけていけば、はじめは遠い存在だったかもしれない先輩も、図書館で手に取る本たちも（！）、キミの先行く仲間になるかもしれない。そして、キミはキミじしんの道を歩きつづける。

* BGMは、色川武大『うらおもて人生録』新潮文庫、一九八八年

（おおかわ・まさひこ）総合国際学研究院教授